

〈論文〉

通訳教育の諸相:通訳者養成から通訳訓練法による英語教育まで

熊谷 ユリヤ

I. はじめに

本稿は、日本における「通訳教育」の大多数を占める英語通訳教育について、通訳学校における「プロフェッショナル通訳者の養成」から、近年大学レベルで増加している「通訳訓練法を応用した英語教育」まで、また、その両者の間に存在する様々な対象・英語レベル・内容・目的で実施されている教育の諸相を論じている。

尚、著者が大学における通訳教育・通訳訓練法を用いた英語教育を担当する一方、研究のフィールドワークとして、現役の会議通訳・同時通訳活動、通訳学校でのプロフェッショナル養成教育・企画も行っていることから、文献によらない経験的通訳教育論も多くの部分を占める。その他の国内外の機関における通訳教育に関しては、現地機関での聴き取り、卒業生・受講生からの聞き取り、およびウェブを含む文献による。

II -1. 通訳者養成教育

ひと口に「通訳教育」といっても、様々な側面があるため、まず、高度な第二言語の運用力を有する対象者へのプロフェッショナル通訳者養成が主である西欧の通訳教育現場、通訳教育の先進国におけるプロ養成教育機関の通訳養成の様々なプログラムの傾向をまとめた。

更に、西欧とは異なる事情を有する日本における、プロフェッショナル通訳養成教育、および、「通訳訓練メソッドを用いた英語教育」という独自の側面を考察した。近年の国際化・少子化にともなう大学の政策として、後者の分野が拡大している現状を考察する。

II -2. 国外の事例

西欧の多文化・多言語社会における通訳養成教育のケーススタディとして、本稿では、ヨーロッパ (EU)、アメリカ、オーストラリアを若干取り上げた。ヨーロッパは国境を接する国々間の移動、また他の三国は特に移民の影響から、多文化・多言語の歴史があり、バイリンガルや母国語 (A 言語) に近いレベルの第二言語 (B 言語) 力を有する準バイリンガルも多い。

したがって、通訳教育は極めて高度な言語運用能力を大前提とする傾向がある。通訳者養成、通訳研究過程への入学条件は非常に高く、卒業要件も厳しい。実践と理論両方を重視し、論文またはプロジェクトにより修士号 (あるいはディプロマ) が授与される。更に公的機関でのインターンシップ制度も充実している。

II -3. ヨーロッパ

EU によれば、「言語はヨーロッパの財産である」という理念に基づく多言語主義を維持するため、EU の年間予算の 1% に相当する費用が使われ、欧州議会に所属する約 430 人の会議通訳者と 2300 人のフリーランス会議通訳者が、23 の公用語のリレー同時通訳を行う。こういった人材を育成するために、パリ、ジュネーブ、ハイデルベルグはじめ多くの大学の大学院レベルで実践と理論を兼ね備えた、大学院レベルの会議通訳 (同時通訳) を行う人材養成が主流となっている。

また、多くの文献で指摘されているように、ヨーロッパでは、第二次世界大戦のニュルンベルグの戦犯裁判で四か国語の同時通訳が行われた頃から、通訳教育が広まり高度な専門職としての通訳者が認識されたという経緯も、この背景に存在する。

日本語 - 英語間のプログラムを設けているのは、パリ大学の ESIT (通訳・翻訳高等大学院) と英国のバース大学通訳翻訳修士日本語科など、また、ニューキャッスル大学は、ディプロマ、修士号・博士号レベルまでの翻訳・通訳プログラムを提供している。国際会議通訳者協会 (AIIC) が規定する会議通訳者のトレーニング・プログラムの基準に基づく同時通訳教育では、現場を再現したデジタルブースのあるラボを使用して、複数言語のリレー同時通訳による模擬国際会議も授業の一環として行われるほか、国際機関でのインターンシップ、研修の機会も提供される。

また、リエゾン通訳と呼ばれるビジネス会議での通訳や、病院、警察、裁判所、地方自

治体などの公的機関での通訳（コミュニティ通訳）も学ぶことができる課程も提供されている。授業の一部はビデオ撮影され、学内ネットワーク上でアクセスし、復習をすることができる。

II -4. アメリカ

アメリカを代表する世界的な通訳教育機関が、ジョージタウン大学とモントレイ国際大学（MIIS）である。MIISは日本語の翻訳・通訳学修士プログラム、会議通訳学修士プログラムを有し、ヨーロッパ、日本同様、現役通訳者として第一線で活躍する教授・講師が指導する。

卒業後は即戦力として米国政府機関、国連や国際機関等で会議通訳業務ができるトレーニング内容と就業支援を誇る。AICCのトレーニング・プログラムの基準を完全に満たす英語・日本語通訳者養成のプログラムを有することでも知られる。アメリカでは各教育分野、政府・非政府も企業もインターンシップやOJTに対する理解が高いこともあり、インターンシップ、OJTの機会にも恵まれている。

一方、コミュニティーレベルの通訳者からの聞き取りによれば、急増する移民に対する言語サービス、通訳者の待遇は各州や公共機関により格差がある。財政的な理由から、高度な教育を受けた通訳者ではなく、ボランティアや低料金で働く通訳者が活動する場面も多いため、会議（同時）通訳者や企業内通訳者に比べて問題が多いという。

II -5. オーストラリア

ヨーロッパの事情とは異なり、オーストラリアでは、医療、司法・警察関係のコミュニティ通訳者の比率が高いのが特徴である。また、大学・大学院の他に、TAFE（Technical and Further Education）という職業専門教育機関でコミュニティ通訳のプログラムを提供している。

オーストラリアで公的機関等に雇用されるためには、国家資格であるNAATI（National Accreditation Authority for Translators and interpreters）取得が要件であるが、資格を取得するには、NAATI資格試験を受験して合格するよりも、NAATI認定のプログラムを履修することが近道であると考えられている。教育機関が提供する認定プログラムを

優秀な成績で修了すると、各レベルのNAATI資格が与えられるというものである。

日本語が経済言語として重視されていることもあり、クイーンズランド大学、モナッシュ大学、マッコーリー大学はじめ日本語と英語間の優れたプログラムが多く提供されている。欧米の機関同様、実践的養成教育のみならず、高度な通訳理論・倫理・背景知識を学ぶことができる。革新的な教授法や学習者主体型のアプローチが採用されていることが特徴である。民間に雇用される場合も、通訳業務の難易度に応じたレベルのNAATIの資格が求められることが多いため、高レベルの資格を得た学習者にとっては、教育・トレーニングから業務へのルートがある程度確立している。

Ⅲ-1. 日本の通訳養成教育

あるシンポジウムにパネリストとして参加した際に、「通訳（者）というのは資質によるのでしょうか、あるいは育つものなのでしょうか」という質問を受けた。四人の通訳関係パネリストの答えはもちろん全員「育つもの」であった。高度な外国語力とある程度の素質があれば、対象言語が話されている国に長期間居住した経験があるか否かにかかわらず、努力と教育やトレーニング次第で、「何ら」かのレベルのプロフェッショナルな通訳者に「育つ」ことは可能なのである。

日本では、「語学ができれば通訳ができる」「日本語から英語への通訳は縦のものを横にするだけ」「英語から日本語の通訳は単語を訳して『て・に・を・は』を付ける行為だ」という誤解がいまだにある。しかし、通訳にとってスキルは、背景知識・教養、対人言語コミュニケーション能力などと共に重要な部分であり、スキルは「学ばれる」べきものである。すなわち、英語通訳の場合、英語が出来るだけではプロフェッショナルとして通用する本格的な通訳が出来るとは限らない。しかし、「その逆は真ならず」である。

ここで、日本での通訳学校と大学・大学院レベルにおけるプロフェッショナルな通訳者養成教育を考察する。上記Ⅱ.で扱った国外事例の国々との大きな違いは、会議通訳以外の一般通訳（リエゾン、ビジネス、コミュニティ、企業内等）のうち、西欧型とは異なる需要が多いことである。これは、実用レベルの英語運用能力がない日本人クライアント、日本語を話さない外国人クライアントが多いことが一因であろう。また、日本語と英語の構造的差異故に、起点言語（SL：Source Language）を聞いて瞬時に分析・解釈・再構築して、出力される目標言語（TL：Target Language）で再表現・伝達を行うためには、同時通訳以外の通訳であっても、本格的な業務には、高度なスキル習得のためのトレーニングが必要となることである。

Ⅲ-2. 民間の通訳学校

「プロになる完全ナビゲーションのため」の専門誌『通訳・翻訳者になる本 2013』には、「技術の習得 & 仕事獲得のための」主な民間プロフェッショナル通訳者養成学校 43 校のデータが掲載されている。西欧との違いのひとつは、大学・大学院レベルでのプロ教育よりも民間、しかも、通訳エージェントや国際会議のオーガナイズ会社が直接的間接的に運営するものが殆どという点である。

受講生の大多数は社会人であり、バイリンガルの帰国子女から、英語学習者、ビジネス、ブラッシュアップ、プレ通訳初修者、セミプロ、プロなど幅広い経験・レベルの対象者が、英語のレベルチェックを受けて、各クラスに振り分けられるというシステムが殆どである。大手・有名エージェントが運営する多くの通訳学校では、レベル分けの結果、通訳訓練には入ることができない英語力であると見做された場合、英語力強化、プレ通訳、基礎コースなどにしか入ることができず、進級試験を受けてはじめて通訳レベルに進むのが一般的である。

Ⅲ-3. 講師と教授法

筆者が、同時通訳の草分けの一人、西山千氏の同時通訳講座を受講したのは四半世紀以上前のことである。同氏による当時の教授法は、ルーティーンのウオームアップ的な基礎スキル訓練はせずに、ニュースの音声教材を流して受講生が逐次通訳をし、次に同じ教材を同時通訳をして、講師はフィードバック・コメントをし、随時模範通訳をするものであった。更に、その合間に、通訳の現場の体験談を聞かせていただき、通訳者としての心構えや通訳のヒントを伝授していただく、という実践的ではあるが伝統的なものであった。

現在は教室の機器が整い、指導法も多様になっているが、教材や教授法が講師に任されているクラスではこの伝統的かつ究極の教授法が行われているケースも少なくない、というのが受講者からの聞き取りやコメントからうかがえる。

バイリンガルであった西山氏の場合は、唯一受けた同時通訳訓練は、アメリカでの「リテンションとリプロダクション（英文を聞いて記憶し、そのまま再現する）」だったので、筆者が受けた指導は受講者のレベルに合わせて、まったく異なるメソッドを行っていたということになる。

プレ・基礎のレベルでは基礎訓練のみや、基礎と実践を組み合わせたコースが多い。逐

次通訳では、「ノートテイキング（メモ取り）は個人が自分に合ったものを工夫すべき」という伝統的な考え、あるいは、通訳メモは企業秘密ではあると考え、あえてメモを見せることをしない講師も少なくない一方、近年はノートテイキングの実際を解説付きでみせるDVD付きの教材も出版されており、自分の通訳メモを開示する講師も増えてきたという。

“Those who can do do, those who can't teach.”（自ら実践可能な者は実践し、出来ない者が指導する）という慣用語は、通訳の指導者には当てはまらない。通訳クラスでは、ほぼ全員が現役の通訳者であり、会議（同時）通訳クラスは教材は時事ものが多いが、講師である通訳者が現場で使用したものも許可済みのものは使用される。通訳教育の講師多くは、自分が受けた訓練と現場体験から得たヒントに基づいて、指導をすることが多いという。更に、日本通訳翻訳学会などの学会誌や研究会を通じて、あるいは、実際に海外の大学院で養成教育を受けた通訳・講師も増えてきているため、Ⅱ.の機関で実践されている教授法に基づいた指導も主流になりつつある。

Ⅲ-3. メリット

受講生にとって、エージェントの学校で学ぶメリットは、自分のロールモデルとする現役講師から直接学び、縦や横の人間関係を構築し、現場体験を聞くというほかに、エージェントからOJTや業務を提供してもらう機会があることが大きい。通訳学校にとっては、高度なレベルが要求されない業務や、サブ的な業務は受講生を比較的安価に雇用できるというメリットがある。また、中級や上級レベルのクラスにはプロ通訳者が在籍しているため、エージェントが信頼する講師に、特定の通訳業務に適した語学力・スキル・パーソナリティーを持つ受講生を推薦してもらうことで、派遣する通訳者の品質保証も行うことができる。

講師をしている通訳者のコメントで多かったメリットは、「夢を持っている若い人達の夢を叶える手伝いが出来る」、「後継者を育てたいという使命感」を満たし、「自分の体験を伝えたいという充実感」である。筆者の場合も、同時通訳ブースにOJTで一緒に入ってもらって「レシーバーや携帯電話を切ってください」というシンポジウム開会前のアナウンスをして震えていた受講者が、一年後に同時通訳として一本立ちし、対等なパートナーとして、ブース内で並んで15分毎に交互に同時通訳が出来た時の達成感が、通訳教育の大きな原動力になっている。

IV -1. 大学・大学院レベル

大学・大学院レベルでは、通訳者養成と通訳理論研究、その複合の三種類にわけることができる。従来は、職業訓練としての通訳者養成は殆どが民間の通訳学校であったが、大東文化大学（通訳論研究指導）は、1995年度に日本で初の大学院レベルの会議通訳者養成の修士課程を開設した。2010年現在で卒業生の約4割がプロフェッショナルの通訳者としてデビューするという成果を収めている。その後も、日本での大学や大学院レベルでの会議通訳者養成が開始された。民間の学校と異なる点は、理論や背景知識となる幅広い教養をカリキュラムにとりいれたところにあり、より西欧の通訳養成教育に近い広範囲な内容を特徴としている。

東京外国語大学の言語応用専攻の国際コミュニケーション・通訳専修コースでは、通訳者をターゲットに、高度職業人の養成を行っている。日本における通訳教育創始者の一人、斎藤美津子氏により会議通訳者養成が行なわれた国際基督教大学、立教大学大学院の異文化コミュニケーション研究科、会議通訳法研究、通訳翻訳研究、明海大学の外国語学部国語学部通訳・翻訳コース、津田塾大学の副専攻としての「翻訳コース」と「通訳コース」、神戸女学院大学大学院・同大学院文学研究科の英文学専攻・通訳／翻訳コースをはじめとする大学が会議通訳者や国際コミュニケーター、研究者を輩出している。

IV -1. 通訳訓練法による英語学習

学部レベルの「通訳教育」は、大きくは「プロフェッショナル通訳者養成を目的とするかどうか」で二分されるが、日本の大学のシラバスやカリキュラムを詳しくみていくと、二極化ではなく、学生の英語力、専攻、目的により、その中間に数多くのグラデーションをもつ多極化現象が見えてくる。

上記Ⅲ.の本格的な「会議（同時）通訳者の養成を目指す」プログラム、逐次通訳やウィスパリングを主とする学部レベルにおける通訳訓練法による英語学習「一般通訳など、その他のプロフェッショナル通訳者養成」、「通訳養成訓練を行い、それを通じて英語を派生的に身につける」プログラム、「異文化コミュニケーションの視点や通訳論など、スキルを主眼としない理論科目」、そして、「通訳トレーニング法を用いた英語学習科目」という多様性が拡大している。

IV-2. 訓練スキル

プロ養成のための通訳学校で筆者が用いている各種トレーニング法は、英語学習に通訳訓練法を一部または全面的に取り入れる、あるいは英語通訳の授業ではあるが本来の目的は英語力養成という大多数の大学における「通訳教育」においても有効であると思われる。次に、大学での通訳訓練法（トレーニング・メソッド）あるいは、それらを応用した英語教育に有用であると筆者が考えるプロ通訳者養成教育メソッドを、実際に加えたアレンジとともに解説を加えて挙げる。

1) Ad-hoc interpreting

アドホック（体系的ではない、その場かぎりの）通訳。トレーニング受講開始時に行い、トレーニング後に比較することも有効。

2) 逐次通訳 Consecutive Interpreting

逐次通訳練習とひと口に言っても様々なバリエーションが考えられる。（メモ有り・メモ無し、複数の文⇒パラグラフ⇒複数パラグラフ、原稿有り・無し、）

逐次通訳の技術を学ぶにはまず、メモを取らないで理解して約させ、次第に数字・固有名詞のみのメモ、記号も交えたメモやイメージメモに移行してから、本格的なノートテイキングを指導する方法が有効と考える。ノートは、OHP資料提示記で他の学生にも見せて説明、講師のノート共有。CALLの会話機能を利用するか、一斉発話で訓練を行う。時には留学生やゲストスピーカーを招いての訓練も取り入れ、話者演者と共にクライアントやオーディエンスの前に立ち、話者の話を文章あるいは段落ごとに区切って交互に通訳していく。上級クラスでは、英語によるプレゼンテーションと相互通訳も行う。

3) ウィスパリング同時通訳 Whispering

ウィスパリング同時通訳練習（メモ有り・無し、テキスト有り・無し、PPT有り・無し、打合わせ有り・無し）

中級クラスでは、一度逐次で訳したものをシャドウイング、リテンションとリプロダクション（短期記憶保持と再現）、クイック・リスponsなどの訓練を通じ、ウィスパリング同時、または、CALL同時通訳機能を使用して、同時通訳をする。上級では、初見教材でも行う。

4) Quick Response

単語、フレーズ、文を聞いてすぐ反対の言語にする。ウォーミングアップに使用。

- 5) **Lagging** (1～2語遅れ)
単語、フレーズ、文を聞いてすぐ反対の言語にする。ディレイド（次の語／フレーズを聞いてから）、オーバーラップト（次の語にかぶせて同時に）
- 6) **Vocabulary Building,**
語彙の増強法、対訳の文章から Excel で対訳単語表をつくり①教材に出た順 ②アルファベット順 ③五十音順 の三種類に並べ替えて印刷 **Quick Response**
- 7) **Shadowing**
シャドーイング（音源に合わせて同時リピート）。①オリジナル音源の抑揚・発音などプロソディー再現 ②内容に集中したコンテンツシャドーイング（テキスト有り・無し）
- 8) **Delayed Shadowing**
数語遅れのシャドーイング、すなわち継続的リテンション⇒ リプロダクション（3語～7語）
- 9) **Segment Listening ⇒ interpreting**
区切り聞き ⇒ リテンション・クイック・レスポンスの連続で通訳する。（有声・無声）
- 10) **Segment Listening ⇒ retention / reproduction**
区切り聞き ⇒ リテンション・クイック・レスポンスの連続を無声で行う（口あけのみ、頭の中だけで）
- 11) **Retention / Reproduction**
フレーズ、短文、長文：英文のセグメントのまま記憶（オリジナルの英文できるだけ正確に再現）
- 12) **Dictation**
聞き取り書き。 後で語数を数えて正解率を出す。マイナースペルミスは OK
- 13) **Speed Reading**
1分間に読んで理解できる時間をカウントしながら音読する。通訳練習としては、黙読や口を大きく動かして読んだり「頭の中でも声を出して」読む。
- 14) **Overlapping**
テキストを見て英語音声聞きながら、発音・抑揚などをシンクロしながら音読。二倍速の英文を同時リピート
- 15) **Overlapping x2 倍速 3 倍速**
英語番組や英文音声を二倍速で再生して、テキストを見ながらオーバーラッピングをする。

16) **Slash Reading (FIFO First-In-First-Out)**

意味のまとまりごとに / // 」 などを入れ、頭ごなし訳（録音有り・無し）

17) **Sight Translation (FIFO)**

サイト・トランシレーションまたはサイトラ Slash Reading の進化形：聞き易い訳を心がけ（録音有り・無し）

18) **Summarizing**

パッセージの内容を要約通訳，または起点言語で要約する（または要約通訳する。要約率目標を%で指示）

19) **Paraphrasing**

別の英語で言い直す（聞き取り，読み取り 段落，スピーチ全体）

20) **Note-taking**

メモ取りまたはノートテイキング 20-a.：一定の長さの英文を聞いて，簡潔なメモをとり再現（固有名詞と数字のみ ⇒ 記号と略語も ⇒ 一般的なメモ）基本ルールを示し，見本は見せるが，自分で工夫させる。20-b. 日本語または英語のテキストを見ながら「理想の通訳メモ」作りをする。20-c. ペアワークで，相手に話してもらってメモを取り，これ以上長くなると通訳が出来ないという限界が違ったところで止めてもらって通訳する「限界メモ取り」。

21) **Advanced Note-taking**

ノートテイキング 理論的な枠組みもわかるような立体的なメモ取り。

22) **Public Speaking**

日本語，英語でのスピーチ（滑舌，抑揚，声量，顔上げ）NHK アナウンサーによる日本語のシャドーイングやオーバーラッピングも効果的。早口言葉やアナウンサートレーニング教材も使用。

IV -3. コメント，アドバイス

通訳学校同様，各大学で通訳関係の授業を担当している教員は，伝統的には実際に通訳者としての経験者が殆どであった。自分が通訳学校で学んだこと，実際の現場経験から得た知識を活用する一方，意欲のある学生にとっては現役・あるいは経験者から学ぶことは役割モデルの面からも意味がある。ただし，今後は通訳者経験が無い講師が増えるケースも増えると思われるため，学生の訳出に対するコメントの模範や具体的な通訳指導の方法

にもアクセスできる体制が必要である。学生の訳出に対するコメントや通訳訓練によって動機づけをされた学生の自主学習のアドバイス、上記の基本トレーニングの応用を提案するコメント、心構えや態度のコメントモデルの一例は次のとおりである。

0. たとえ通訳トレーニングであっても、ロールプレイやペアワークで実際に通訳を行う実践的なものは、クライアントの前で行う「通訳現場モード」で臨むようことが重要である。訓練中と事前準備の段階では自分に厳しく ⇔ 通訳現場 (& 現場モードの訓練) では自信過剰気味が良い。クライアントを味方につける。些細なミスは忘れて前進。⇔ 終了後は反省・見直し、失敗しても落ち込まず悔しさをバネに次に備える。
1. 「通訳は逐次に始まり逐次に終わる」「通訳の現場では絶句や言いわけは許されない」。だからこそ、通訳訓練法をとり入れた英語教育が効果的である。
2. 逐次はノート・メモ取り、短期記憶、再現力が重要 (テキストを見て記号・略語の定義、理想のメモづくり)
⇒ただし、聞いて理解したことを忘れないようにメモとりをすることが重要。聞いたととりあえずメモをすると失敗
3. まとめメモ (パラグラフを聞き終わってから制限時間以内にメモとり ⇒ 通訳)
4. Delayed Shadowing (時差シャドーイング) ⇒ 部分同通 ⇒ 同通 ⇒ Retention 3,4,5,6,7 語… 語遅れのシャドーイング ⇒ Retention / Sentence Reproduction ⇒ (録音) ⇒ 客観的自己評価 (*良い点と向上すべき点 ⇔ 悪い点と修正すべき点を記録) のように、単発の訓練ではなく、自分なりのサイクルやルティーンを決めて一定時期行くと効果的。
5. Sight Translation (for a broader eye span) アイスパン (視野) を徐々に広げる 3,4,5,6,7 語… というように、一度に見て訳せる幅を段階的に増やすことは速読訓練に有効。(目線を挙げることの確認には鏡を使用)
左右同等に一度に見て、SL の意味を取り、目を上げて TL で「話す」。
左から右へ直線的に視線を動かすリニアリーディングは絶対にしないこと ← 機能語や長い単語を最後まで読む必要はない。
起点言語 (SL) の文型にとらわれないこと。長い文は受験読みをせず FIFO で。
6. Dual Task / Dual Task Training
・マルチタスク、複数タスク (「ながら族」になる) 時間と集中する時間のメリハリをつける。

<集中力養成>

・シャドーイングや同通をしながら数字を1～100～1を書く、二の倍数、3倍数を書く、大きい数から小さい数へ同様に書いていくことも効果的。一歩進んで、世界の都市名、国名、動物や果物の名前を書くなど別の作業をすることもマルチタスキングの訓練になる。

<日常・教室を出てからが本当の実力養成の分かれ目>

- ・英語ニュースのみ（無意識にシャドーイングしながら他の作業）⇒ 英語と日本語同時通訳入り両方（分析しながら聞く）⇒ 英語ニュースを聞きながら、まったく違うジャンルの本（英、日）を読む（録画を撮り分からなかったところを聞き直す）
- ・英語音源、放送を聞きながら別の仕事をする ⇒ わからない単語や気になる表現があったときのみメモを取り、辞書をひいて保存し、定期的にExcelで単語リストにする。
- ・その場で確認することを怠れば近いうちにその単語が再び現れる（意識にインプットされているので認識はできるが、意味がわからないことになる）
- ・A 言語 声と話し方を商品にしたいなら、日本語のパフォーマンス・ボイストレーニングも重要。
- ・バイリンガルでない限り、第二言語は、各自の目的に応じて、人生のある時期、必死で集中してブラッシュアップし、その勢いを継続的学習に役立てる必要がある。
- ・外国に住まなくても、日本に居ながらにしてITを活用した疑似環境を作ることは難しくない。

殆どの大学生たちにとっては、通訳トレーニング法は長い間慣れ親しんだ日本型の教授法や、英語だけで行う近年の教授法のどれとも異なる、新たな切り口である。新鮮なものと感じて教室の外でも積極的に自習するか、不安を感じ自信喪失につながるが大きく分かれる。導入する際には、学生の英語レベルにあった教材ばかりでなく、トレーニング法と効用の解説が不可欠である。

VI. おわりに

本稿では、通訳者養成教育から通訳訓練法による英語教育まで、通訳教育の通訳教育の諸相を考察した。特に、前半で特定したプロフェッショナル養成の要素を英語教育に取り入れることは有用であることを、具体的なメソッドやアドバイス・コメント例を挙げて強調した。重要な点は、たとえプロ通訳者養成トレーニングではなく、トレーニング法を取り入れた英語教育であっても、「通訳現場モード」で真剣にトレーニングを行う事である。

将来的に業務や外国語ボランティアやコミュニティーレベルで通訳を行うクライアントになる場面は十分に考えられる時代である。これを前提に、英語学習の場であっても通訳者養成教育と無関係ではないという指導側のスタンスが、学習者の意欲向上にもつながり教育効果が高まる。通訳法を応用した英語学習が、プロフェッショナル通訳者養成教育から学ぶことは多い。

日本における通訳教育は、本稿で考察したように、欧米に比べて独自の発達をしてきた。今後、英語を使うことのできる日本人が増加し、海外留学・滞在経験がある日本人、日本語に堪能な外国人が増加してくることを考えるなら、長期的にはヨーロッパのような、専門的な通訳、会議通訳を主流とする時代が来ると思われる。日本における将来的な「英語通訳」通訳教育」を考える上では、英語が今後も主な国際語であり続け、更に、人間を介した通訳の需要が長期的に続くことを前提としている。前者に対応するためにも、今後、通訳メソッドを活用した英語教育が更に盛んになることで、社会全体に通訳に対する理解が広まることが望ましい。

英語通訳教育・訓練は、学習者の第一・第二言語の習熟や運用レベル、学習の目的、意欲、教育機関に応じた多様な顔を持っている。プロフェッショナル養成では伝統的な教授法の利点を確保しながらも、新たなメディア、教授法の研究が進んでいる。今後の通訳や英語、英語教育を取り巻く様々な変化に対応できる、各レベルでの効果的・なメソッドのさらなる開発が望まれる。

<参考文献>

- 染谷泰正 (1996) 「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について - 第47回通訳理論研究報告要旨」『通訳理論研究』第2号 (通訳理論研究会)
- 玉井健 (2005) 『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』風間書房
- 田中深雪 (2004) 「『通訳訓練法』を利用した大学での英語教育の実際と問題点」『通訳研究』第4号 (通訳理論研究会)
- 鶴田 知佳子 (2001) 「通訳の世界を広げる 現代通詞考 第6回 世界の通訳教育事情」『通訳・翻訳ジャーナル』

<参考ウェブサイト>

- 国際会議通訳者連盟 (AIIC) <http://aiic.net/>
- Auckland University of Technology (Diploma in Interpreting and Translation) : <http://aut.ac.nz/>
- 大東文化大学 (通訳論研究指導) <http://www.daito.ac.jp/gakuin/tsuyaku/html/2.htm>
- Eurydice (欧州教育情報ネットワーク) <http://eacea.ec.europa.eu/education/eurydice/>
- Macquarie University (Department of Linguistics) <http://www.ling.mq.edu.au/>
- Monash University Master of Interpreting and Translation Studies <http://www.monash.edu.au/>
- Monterey Institute of International Studies (MIIS Graduate School of Translation and Interpretation)
- Newcastle University (Translation and Interpreting Studies) <http://www.ncl.ac.uk/sml/>
- 東京外国語大学 (国際コミュニケーション・通訳コース) <http://tufs-interpreter.org/>